令和8年１１月1日

特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡　第158次調査現地説明会

所 在 地：福井市　　調査面積：750 ㎡
調査原因：史跡整備事業　　時　　代：室町時代末（戦国時代）
調査期間：令和8年6月～ 11 月（予定）　　調査機関：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡博物館

1．はじめに

一乗谷朝倉氏遺跡博物館では、遺跡を保存し広く知ってもらうため、60 年近くにわたって一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査と整備を行ってきました。令和５年度の第 155 次発掘調査からは上城戸跡外側の整備に必要な情報を得るための調査を継続して行なっており、今回で４回目になります。発掘調査は今後も継続する予定ですが、ひとまず、今回の発掘調査で見つかった土塁（どるい）や石組溝、甕埋設遺構（かめまいせついこう）などについて説明します。

2．調査の成果

調査地　今回の調査地は上城戸跡のすぐ外側に当たります。室町時代末にはこちらが城下町の表となる大手道側で、重臣の屋敷や朝倉氏所縁の寺院が配置されていたことが、周辺の地名などからうかがえます（図１）。調査地周辺も、古文書や過去の発掘調査から、重臣の一人、詫美（たくみ）氏の屋敷があったと考えられている地点です。

城下町一乗谷は、天正元年（1573）に織田信長の軍勢によって攻め滅ぼされ、その後、水田となりました。水田となってもしばらくの間は、大きな土地の改変は行われなかったようです。こうした状況は昭和 44 年（1969）から始まった土地改良事業によって一変します。調査地一帯も昭和 45 年（1970）に工事が行われました。この際に多くの遺物が見つかったことで、遺跡の広がりが認識されるようになります。結果、工事を中止し、延べ 278 ヘクタールが特別史跡に指定されました。これが現在の特別史跡一乗谷へとつながっていきます。

これまでの調査　上城戸跡外側の調査では、町の区画・上級の武家屋敷の有無・上城戸に至る道路といった上城戸の外にあった施設とその変遷、および上城戸の入口や濠など上城戸の構造の解明が課題となります。

予備的な調査の後、令和5年度から開始した本格的な発掘調査では、これまでに、土塁・門・門から続く砂利敷通路の跡、当時座敷飾として珍重されていた陶磁器などが見つかったことで、上級の武家屋敷があった可能性が高まりました。また、上城戸の濠の屋敷地側の盛土（濠の斜面）や、砂利敷通路より新しい時期の石組井戸や上級の武家屋敷よりも古い時期の城下町の遺構も確認できました。

今回の調査では、武家屋敷跡の続きから土塁や石組溝、武家屋敷の外側にあった甕埋設遺構が見つかりました。

遺構　遺構は、過去の調査で見つかった砂利敷通路をもつ武家屋敷に伴うものと、武家屋敷周辺のものとが見つかりました。いずれも砂利敷通路をもつ武家屋敷の時期のものとみられます（図２）。また、砂利敷通路をもつ武家屋敷よりも古い時期の可能性のある土塀の基礎も見つかりました。

武家屋敷に伴う遺構としては、土塁と石組溝が見つかりました。土塁は、過去の調査で見つかっている土塁の続きで、武家屋敷の西と南の縁に当たります。この土塁の内側には石組溝が掘られていました。

また、土塁に直交する土塀の基礎も見つかりました。基礎は埋められていたことから、土塀で区切られた

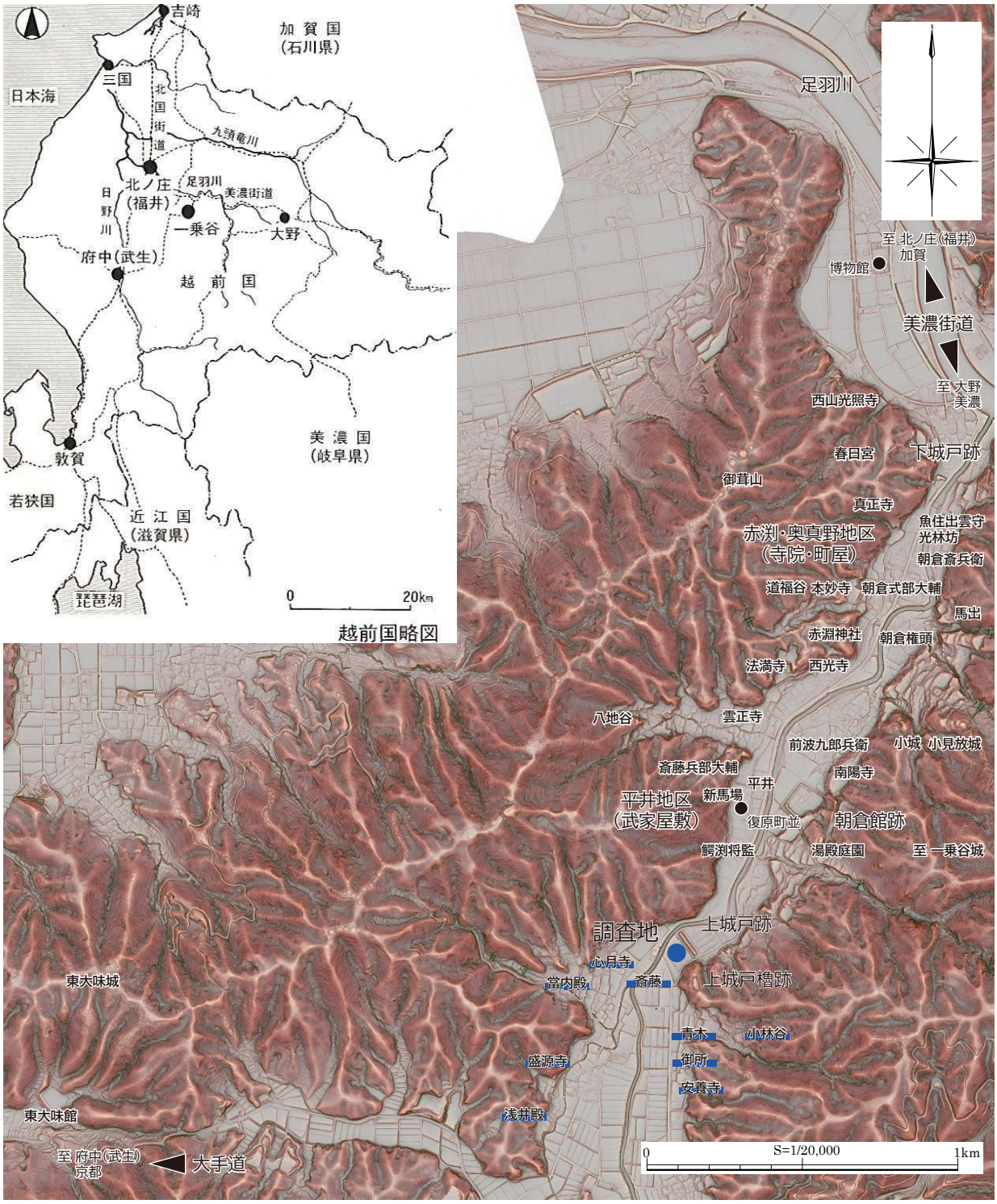
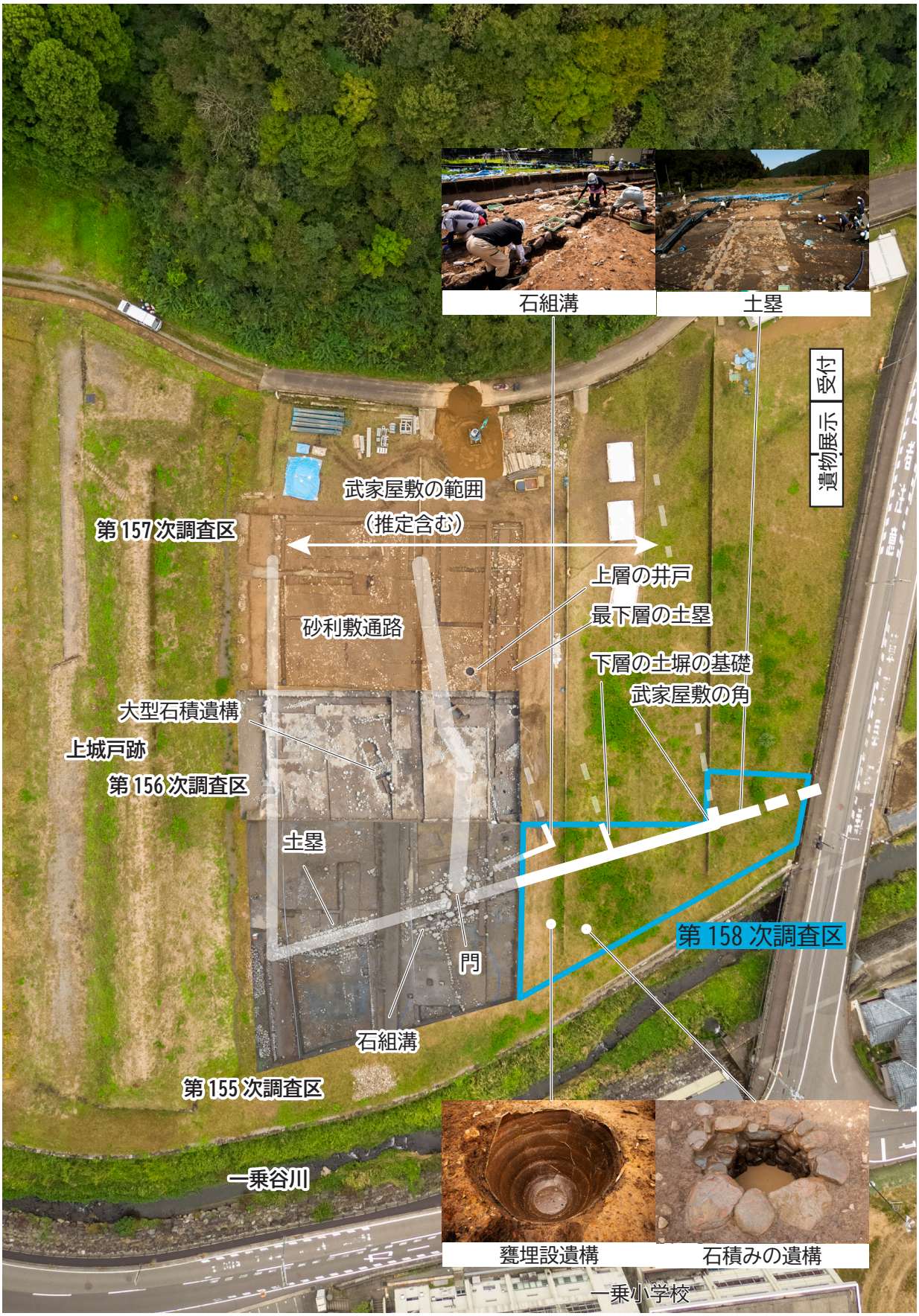


図１　一乗谷赤色立体地図　※博物館で詳細をご覧いただけます。

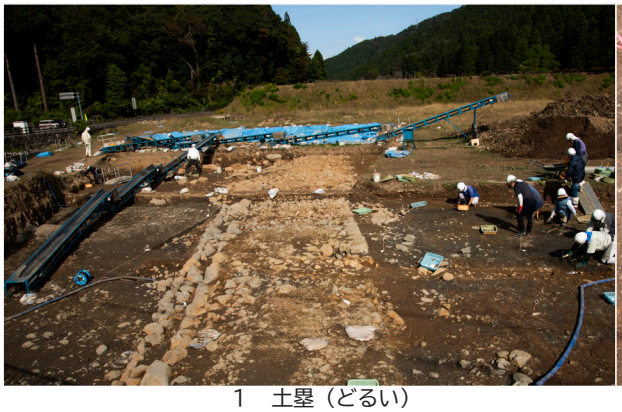
複数の武家屋敷をひとつにまとめて大きな武家屋敷にした可能性も考えられます。

武家屋敷の外側の遺構としては、甕埋設遺構が見つかりました。穴の中に甕の下半を埋めて据えた遺構です。見つかった甕は1つだけですが、周囲には同様の穴を4つ確認しているので、何度か作り直したものと推測できます。

遺物　土師質皿や土釜・土鈴、越前焼の甕（かめ）や擂鉢（すりばち）、瀬戸・美濃焼の皿・碗（わん）・壺、青磁・白磁・染付・華南彩釉陶器の碗や皿といった中国製の陶磁器、笏谷石（しゃくだにいし）製のバンドコ・石樋、銅銭などが見つかりました。土師質皿と銅銭には、地鎮に使われたとみられるものもあります。



第２図　第１５８次調査区と周辺のおもな調査区（第１５７次調査の航空写真に第１５５・１５６次調査の写真を合成・加筆）写真左が北



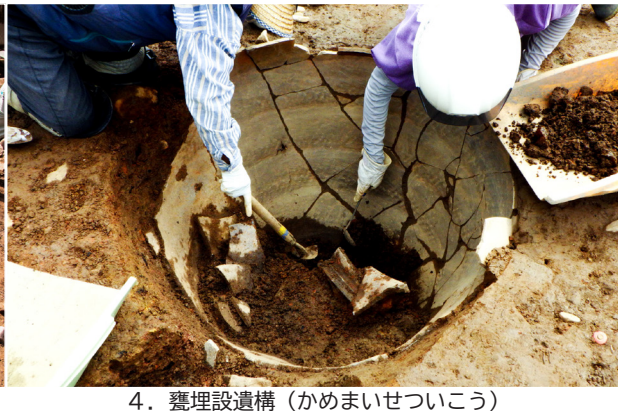
1　土塁（どるい）



2　石積みの遺構



3　石組溝



4．甕埋設遺構（かめまいせついこう）

写真１　おもな遺構



写真２　おもな遺物（縮尺不同）